

今の南千住第二中学校がある土地に1905〜17年にあった火力発電所の模型。高さ46cmの煙突が2本立っていた



100年前の火力発電所の 煙突2本 中学生が再現

に協力を求めた。同校がある場所に、東京電灯（現・東京電力）千住発電所が誕生したのは一九〇五年。すぐ近くにあった、日本の羊毛工業の発祥地とされる千住製絨所へも送電された。赤レンガの建物の両脇に立っていた高さ四十六mの煙突は、火力での発電が終わった一九一七年以降も残り、土地の目印ともなったが、二三年の関東大震災で倒壊。後に発電所は、隅田川の対岸へ移築された。

「当時の南千住は日

きょうと来月4回、一般公開

本の産業を支える重要な場所だった。地域への誇りと愛着を持ってほしい」と斉藤校長。三年生の栗原正光君（も）は「煙突のことは全然知らなかった。歴史が分かって、自分がここに居るのがうれしい」。フロッタージユを指導した美術作家の酒百宏一さん（ひ）は「この生徒がこの土地の記憶を再現することに意味がある。感じたことを次代に受け継いで」と望む。

一般公開は二十九日午前九時半〜午後四時、十一月九、十一、十五、十七日の午後四〜六時半。同NPOが制作した当時の発電所の精巧な模型も同時公開する。問い合わせは同校☎電03（3891）8532へ。

南千住の記憶形に

町の記憶を自分たちの手で再現しよう。荒川区立南千住第二中学校（南千住七）の生徒たちが、校舎の玄関に二本の「煙突」をつくった。地域の歴史を学ぶ中で、いま学校がある場所に百年前、大きな発電所があったことを知ったからだ。学習の集大成となる作品は二十九日から一般公開する。（井上圭子）

「せーの、よいしょ 貼られている。地域学ノ。玄関ロビーの吹習の一環で全校生徒がきげに、生徒たちが訪れた、千住大橋や力を合わせて、高さ約素斎雄神社など地元の大・直径六十cmの円名所旧跡でこすり出した筒が立ち上がった。た作品だ。斉藤進校長

柱の表面には、紙の「町の記憶を肌で感上から色鉛筆で凹凸をじとれる」と、昨年こすり出す「フロッターの活動を始めたNPOージユ」作品五百枚が法人「千住すみだ川」



南千住第二中学校の生徒たちが建てた「煙突」=いずれも荒川区南千住で